
ほのぼの異世界生活

モーリリン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ほのぼの異世界生活

【Nコード】

N60970

【作者名】

モーリリン

【あらすじ】

この物語はチート、最強を含んでおります。苦手な方は申し訳ないです。

男から女に異世界で生まれ変わった人のお話。マイペースで進んでいきますので更新は不定期です。申し訳ないです。

1話 てんせー（前書き）

この物語はチート、最強。若干のグロ要素があります。ご容赦ください。

1話 てんせー

ある学園の一角にある、クエストが受注出来る場、学生課のフロアにある一人の人物が来た。

「この依頼を受けたい」

ローブを深く被った、声からすると女の子の学生が依頼書が貼つてある掲示板から剥がして、カウンターの受付嬢の前まで来て
そう言った。

「はい…この依頼書はBランククエストです。ギルドカードを提示してください」

言われるのが分かっていたのか、直ぐに白が基調のなにやら色々表示されているカードを提示した。

「…はい、結構です。それでは、気をつけてください」

カードを返却してもらい直ぐに歩き出す。

しばらくして、ふとこつ零した。どうしてこつなったのだろう。と

俺の名前は××。名前が分からない？ま、名前何てどうでもいい。
俺はいま輪廻転生とかいうのを味わった直後だ。神様何て見ていないし、

自分が転生した直前の出来事がすっぱり抜けている。ただ、覚えて
いるのは

仕事から帰ってようやく寝れるぞ、そう思ってベットにダイブした
のが最後だ。

その後、気が付いたら……

「まあ…この子…!」

「うむ…何という…」

吃驚している美男美女がぼやけながら見えたわけ。

結論から言おう、この二人は俺の第2の両親だ。…エルフだが。

そう、俺はエルフに転生した。初めは動揺して泣いていたが、魔法
を見た瞬間にその気持ちはすっ飛んだ。

毎日が面白くない仕事漬けより、こちらの方が心躍る。今まさに、
ファンタジーに触れているのだ。

その事が、たまらなく興奮し、たまらなく…嬉しい。別に前世が不
満であつたわけじゃない。

人間関係も別段悪くなかつたし、両親や家族ともそれなりに仲が良
い。友達とも遊んだり

仕事仲間もまあ悪くは無い。が、それはそれ、これはこれ。なつて
しまったのであれば受け入れるしかない。

「シリィー！ご飯出来たわよー！」

おっと、もうそんな時間なのか…あ、そうそう俺の名前はシリィテリア、愛称ではシリィと呼ばれている。
まあ…お察しの通り女なのだ。

「はい」

子供は元気が一番。だが、なぜか顔の筋肉が言う事を聞いてくれない。くそ！俺はこんなにも元気なのに！

そうそう、エルフといたら閉鎖的で、森の奥深くに住んでいると思っていた。まあ事実そういう所で住んでいる

エルフもいる。が、俺が住んでいる村はそこまで森の奥深くではない。…まあ田舎というのは否定できないが。

俺はもう5歳になる。あつという間だ。そこで鏡があるのだが…物凄く美少女だ。

具体的に言つと、髪は腰くらいまであるブロンド色のストレートロング、顔は目がパッチリで唇もふつくと

程よい。頬はうっすらピンクが混じり将来は絶世の美女になるであろう。

エルフは基本美男美女が多いが、俺は両親のいい所を奪ったのではないかというレベルなのだ。将来が楽しみでならん。

部屋から出て、既に料理が並べられているテーブルの椅子に腰を掛ける。

「こあら、手を洗いなさい」

「はい」

てへ、怒られちった… まあいい… ちょっと集中して魔法を二丁。

「水よ…」

これだけで、水が操れるから最高だぜ。魔法Ⅱイメージといっても可笑しくないレベルなこの世界。

固有の魔法にはちゃんと名前が付いているが、それはこの世界の住人がこれはそういうものだ

イメージを持たせるために付いている。俺は異世界人だから、アニメや漫画で色々な魔法や技が有るのを

知っている。まあ、技名言った方がイメージしやすいけどな。そのため、別段固有の名前を覚える必要性はあまりないのだ。この世界の簡単な魔道書を見ても

著作者の想像をどうにか言葉で表しているレベルが多い。つまり、やはりイメージで何でも出来るのだ。

……エターナルフォースブリザードだって出来るかもしれないんだぜ。

この世界の魔法は「火」「水」「土」「風」の基本4種類がある。さらに補助魔法とかもある。

「強化」「回復」後は、相手に不利な効果をもたらす魔法とか。そして上位として

「光」「闇」とかもある。至ってシンプルな構成。だが、シンプルが故に奥が深い。

まあゼロ魔みたいに色々出来ますよと思ってくれてOK。事実、雷とか余裕で出せる。

ライトニングクラウド！とか言ったらホントに雷が発生したのはびつくらこいた。

まあ、この体もチートだからというのもある。

元々エルフは魔力と相性が良い。昔から精霊やその精霊が住んでいる自然に溶け込んで生きてきたから魔力の感受性が抜群だ。さらに俺は突然変異や、進化とも言えるエルフの上位種「ハイエルフ」なのだ。

このハイエルフなのだが、100年に1人生まれるらしい。特徴としてエルフの平均の数十倍以上の魔力を持って生まれると派生するらしい。

さらに、額に何かセンスが良いのか悪いのか分からんが、紋様が浮かび上がるのだ。

なぜ派生するのは、まだよく分かっていない。ただ、過去のハイエルフを見ると皆魔力が恐ろしく多かつたし。

額に紋様がある。俺もその例に漏れず。魔力何て村人全員の合計とどっこいどっこいとか…チートすぎる。

村人は全員で130名位いて全員エルフなのだが…

これだけじゃない、寿命もエルフより長いし、最盛期の状態で体の成長はストップする。

そこから下手をしたら数千年もの間最盛期でいられるのだ。ちなみに、エルフは緩やかだが年をとっていく。

…チートすぎる。ただ、それによりエルフ、ハイエルフ問わず奴隷にされやすいのが現実だ。

ずっと若くて綺麗なもんだし、男だってカッコいい。売れないはずがない。

まあ、この村は安泰しているしそんな事はないと思いたいが。

ご飯を食べて、家の外へ。

庭へ行き今日も今日とて魔法の練習。画面越しに見ていた魔法が自分の目の前で、自分の手で発現する様は

実に愉快で実に面白い。一日中練習しても魔力の関係で魔力切れは起きないし、むしろ増え続けている。

両親も悪戯をしなければいいと思っているのだろうか、割と放任主義で自由にやらせてもらっている。

両親は俺がハイエルフだからと言って、何かさせようと何かになれとも言わない。

ハイエルフは確かに珍しいが、神に選ばれた等々、村人も言っていない。

何故なら、別段今が戦乱の世でもないし、他種族とのいがみ合いも無いに等しいからだ。

この世界「リントブルウ」は大昔、魔族が支配していたといわれるが、そこに爽快と現れた

神様によって地下深くに追いやられて平穏がもたらされたという。

まあ最初の頃は戦争とかあったらしいが

今は平穏穏やかだ。何故か、それは共通の敵が出来たから。

数千年前に突如現れた巨大な迷宮。まあダンジョンだな。そこから魔物がわんさかわんさかと発生し

国同士、他種族同士が結束して追いやったおかげだ。そのかわり魔族や魔物が出てきたわけだ。

といっても、地上にいる魔物なんて、雑魚だ。子供が遭遇したら絶望的だが、魔法や武器が扱える

人にとっては歯ごたえが無さ過ぎる。弱すぎるのだ。まあ中には強いやつもいるが、大体は軍隊に蹂躪され即、討伐される。

俺も魔物と会った事があるが…即殺だった。まあ本当に雑魚だったというのもある。

ファイアーボール！と混乱しながら魔法を放ったら終了した。それこそ跡形も残らなかった。

有る意味驚いたのが今でも印象に残っている。そのあとは、両親にこっぴどく怒られたが……

さて、今練習している魔法なんだが…どうやら俺は氷と強化の相性がいいらしい。

まあ、他の魔法もバカスカ打てるけども。相性がいいなら伸ばすしかない。

氷版のロー・アイアスとか作ってみた。めっちゃ綺麗。俺、魔法の才能ありありだぜ！

どれくらい耐久性があるか分からねえけどな。カッコいいからそれで良いかなと思っている。

まあ、強化を掛けてすげえ堅くはして有るんだけど…試してえよ…強化は、その名の通りかな。色々な物を強化出来る。身体能力や切れ味向上。防御向上。

ただ、自分の体以外や離れている物を強化するのは結構操作が難しかった。まあ直ぐに出来たけども。

この強化だが、極めれば実にチートだと分かっている。

魔力をつぎ込んで強化すると確かに強くなるが、重ねて掛けたほうがより強くなる。

詳しく言くと幼女が大木を氷のナイフで切断する図面が見れるぜ。さらに、軽く地面を蹴っただけで数メートルジャンプしたり出来る。

俺のチートぶりは解ったであろうか？しかも、まだ5歳なのだよ。

「い飯よー」

おっと、今日は母が呼んでいるので練習はお終い。さて、今日の夕食はなんだろうか。

ユリアサイド

ティリアが生まれて早5年。あつという間に過ぎて行っただわ。

一目見た瞬間、感じた瞬間。この子はいろんな意味で大きくなると思った。…たぶん

でもでも、魔力とか凄く多かったわ。正直この子一人で大抵の魔法は苦もなく扱えるのではないだろうか。

というのも、この子がようやく立って歩く頃にはもう、簡単な魔道書を読み漁っていたのだ。

夫の書斎にある魔道書を読んでいるときはただ、流し読みだと思っていたのだけれど…

ちゃんと読んでいたと気付いたのはその1年後なのよねえ…

外に行つて、もうすぐ帰ってくるかなと思ってたら、案の定帰ってきたのだけれど…

目がすっかりくららしていたの。理由を聞いてみると、何とモンスターを倒してきた何て言うの。

…心臓が止まるかと思っただわ。手を上げる所だったけど、踏みとどまって凄くきつく叱っておいたけれど…

でも、倒してきたモンスターの姿かたちを聞いていると、どうもこの辺をうろついているゴブリンだと思うの。

それを一瞬で倒すなんて…末恐ろしい子。ダンジョンなんてあるのだし…出世するかもしれないわ…

そしたら、お金を…あーだめだめだめ！我が子からなにお金をむしり取ろうとしているのよ！

まあ、今後はあまり遠くに行かないでと叱って、許可がなければ庭までしか外出を許さない事にしたの。

…でもあの子の事だから、何だって一人で出来ちゃうかもなあ…母としては寂しいのよ。

…まあ夜の方は夫がいるおかげで全然寂しくないのだけれど。

おっと、自己紹介が遅れたわね。私の名前はユリアージュ。ユリアって呼んでね。

過去には大陸随一の魔道士って自称してたわ。…嘘よ嘘。ちょっとした茶目っ気よ。

でも、魔法は大得意よ。夫とは、ダンジョンでばったりと会って、丁度前衛が欲しかったからそのまま…

気が付いたら結婚してました（笑）

で、ぐだぐだ時間が過ぎて行ってもう子供が生まれて今、育ててるって感じかな。

まあ、悪い気はしないのよね。夫もいるし子供もいる。幸せだなあ。

そうそう、シリィに剣の使い方教えてやるぞあ！って夫は意気込んでたなあ…

ふふ… 本当に面白い人生を歩みそうだね… シリィ。早く大きくなって都会に暮らせるくらいのお金…

お金を稼いでほしいなあ……ふふふ……よーっし！私も魔法を教えるぞー！

行く行くは将来のために！

あとがき

はじめまして。モーリリンと言います。

まずはここまで読んでくださりありがとうございます。

この話はほのぼのと進んでいきなあと感じております。

チートですがw

誤字脱字あつたらご報告をお願いします。

では、これからよろしくお願いします。

2話 初めてのだんじょん

やあ。こんにちは。元気だったかい？俺は凄く元気さ。

何かある日を境に両親が俺を躍起になって鍛えるからなんだろう…
今なら魔王でも倒せると思う。

…嘘だよ。まあエルフは寿命が長い分お気楽に生きてるからあんまり自己の鍛錬ってやらないと思ってたんだけどね。

…俺？さっきも言ったけど、両親のおかげでめきめき実力が付いちやってさ。何かダンジョン行く羽目になった。

簡単なダンジョンなんだって。初心者用の。うん。ジオル洞窟って言うんだって。うん。

もう目の前に有るんだよね。うん。…村から出てすぐなんだよね。うん。

良いんだ…こんな近くにダンジョンあって良いんだ…

「ふふ…緊張しているのかな？」

「まあ最初のダンジョンだしな」

ははは、ふふふと笑っている二人は何かもう私服なんだけど。守る事考えてないよこの二人。

何？そんなに強い家の両親は。まあ俺もそんな格好なんだけど…
可愛いピンクで縁取った白いローブを着てこれまた可愛いブーツを履いて、

1メートル行かない位のなんだろう。はたから見るとただの長い棒を携えている。

母も何か立派な杖に父は大剣。二人とも私服と何かただのブーツ。… 大事な事だからね。もう一度言ったよ？

そう、ダンジョンで私服… あれ？ダンジョンだよね？何か違うよね？ピクニック？ピクニックなの？

「全然緊張してない様だな…」

「流石私たちの子ね…」

何かすさまじい勘違いをなさっているが、俺の表情筋はすでに御臨終なさっている。

まあいい… 内心結構興奮してきてるんだよねえ… 試したい魔法とかが有るし…。くくく…

「な…なんて重い魔力なの…」

「し、シリイ… まだ敵はいないぞ……」

おっと、俺の魔力が漏れていたな…

何か周りに動物がまったく近寄らない。凄く森が重苦しいです。

俺の魔力のせいなんですね。わかります。俺の魔力はありすぎて、少しでも漏れだすと何か凄い重圧を与えるらしい。

俺はまったく自覚はないが。

「さあ… 気を取り直して」

「ええ、行きましょう」

そうして俺たちはダンジョンの中に入って行った。

中は薄暗く壁は岩でゴつゴつしている。が、道はさほど悪くはない。

これはダンジョンの特性だ。

単純な洞窟と違いダンジョンは道がしっかり築かれている。なんでこうなっているかは不明。

ただ、大昔からこうなっているということは確か。学者が躍起になつて研究しているが…俺にとってはどうでもいい。

外の雑魚相手は何度かしたし、獣を狩る…命を奪う行為もまあ慣れた。あまり自分の回り以外固執しないし

俺は結構快樂主義だからな。自分がよければすべてよし。とまでは行かないが概ねそんな感じなスタンスだ。

そんなわけで、モンスターを倒すことにさほど抵抗は無いが…果たして、自分の力がダンジョンに蔓延るモンスター通用するのか。

そこが一番の懸念だ。両親は瞬殺だよ！と太鼓判を押してくれたが、果たして…

「おっと、前方にゴブリンが…3匹いるから」

「はい」

…気が抜けるなあ…そう思っていると母が何かこつち見てニヤニヤして父に告げ口をしている。

終わったと思つたら

「じゃ、私たちはここで見てるからがんばってね」

「…」

はあああああ！？馬鹿いつてんじゃないよ！死ねと？俺に死ねと？

「大丈夫さ、俺たちの子だもんな」

意味わからん根拠だぜ！もう！こうなりややけだ！

俺は全身を強化し、氷影剣を展開。…この氷影剣は…まあDMCのあれだ。便利だよ。
いざとなったら凍り版ロー・アイアスに大変身だからな。防御も攻撃もかねているんだぜ！

まあおつかないので接近はせず、超遠距離からの一方的な魔法で殲滅しますか。

「アイスニードル」

ニードルとか言っても俺のは何だろうランスみたいにでかい。
それが空間を埋め尽くさんばかりに展開している。たぶんこれくらいで一匹は倒せるのではと思っていた…

杖を振り下ろして魔法を一気に射出する。

加速の魔法陣を前に展開して更に速度を上げてゴブリンに突き刺さる。

断末魔が少し聞こえてきたと思ったら…なんかあっけなく終わった。

ふう、とため息をついて氷影剣を解除して両親のほうに振り返ると…
口をあぐりとあけたまま固まっていた。

「どうしたの」

一声掛けてようやく動きだした。

つか、あそこまで弱いなんて思っても見なかった。ダンジョン化け物は当てはまらないな。

…まあ初心者用のダンジョンだからかもしれないが。

「は、はは…」

「す、すごいわねえ…」

凄く引き攣りながら褒めてくれた。
やっぱやりすぎていたのか…今度から加減を考えなくては。

「こ、今度は接近戦で倒してくれないか？」

おいおい…10歳の子供に何を言っているんだ。と、思っているが
コクンと頷いてすぐに索敵。

…今、凄く、興奮してます。

30分位たってようやくゴブリン共を発見した

「よし、じゃささ」

父のアドバイスの前に魔力で体を強化し更に重ねがけを行い、一気に接近。

棒状の杖に氷の大剣を展開して一気に振り下ろす。

ゴシヤ

一番距離が近かったゴブリンが、生き物が出せる音を超えた音を出して絶命した。

更に、そのまま他のゴブリンめがけて横なぎに一閃。

ズル…

体が横にずれて行き上半身と下半身がお別れしていつて絶命した。
何だ。あんまり強くないのだな…
ひどく血生臭いので、一気に空間を凍結し、哀れな肉片を氷のオブジェに変えて杖を床にトンと付き

パリン

哀れなオブジェを氷の粒に変えてすっきり！腐ると臭そうだからな。次の人に悪いだろう。

氷の大剣を解除し両親の元へ歩いて行く。やはり口をあんぐりしながらだ。

…なんでそんなに驚いているのだろう。5年も扱かれたのにこれくらい出来て当たり前だろう。

…まあダンジョンのモンスターが俺の予想より遥かに弱いことも真っ先に飛び込めた一因がな。

「ま、まあ…全盛期の俺と比べると…ま、まだまだだ！うん！」

「そ、そうね！魔法の精度も全盛期の私よりはまだまだだね！ええ！」

なに10歳の子供に張り合ってたんだよ。この両親は。

まあ、いいや。今日はもう疲れたお。…いやぶっちゃけもう帰りたいだけなんだけどね。

side ドロイド

よ！俺の名はドロイデール。ドロイドって呼んでくれ！

それはそうと、家の娘が凄まじい…何が凄まじいかって？

訓練つけた瞬間からめきめき上達してくるじゃねえか…ほんと、天才的なバトルセンスだ。

魔法のセンスもずば抜けて剣の才能もずば抜けている。さらに、戦

闘者としてのセンスも天才的だ。

…あれ？死角なくね？まあ、唯一の弱点といえば、敵を過剰評価しすぎるからだ。

悪くは無い。生き残れる戦い方をするだろうしな。それは嬉しい。が、それが過ぎると、持ち前のセンスを発揮しない。

まあ、一度戦って敵はあまり強くないと判断すると本当に容赦なくなるんだがな。

俺との訓練は常に俺が自分より強いと判断して動いているからせつかくのチャンスを棒に振っているんだよな。

まあそれは間違っていないんだが…勿体無いと思わざるを得ない。

可愛いから良いんだけどな！訓練が終わった後に蜂蜜水を飲むのだから…その時の微笑んでいる姿は

まさに女神！この子は将来えらい男殺しになるな…

まあそれはさて置き、今日はシリイの初めてのダンジョンだ。

行く前日にシリイに一言言っただけだった。…冷静だぜ。流石家の娘と言った所か。

まあ、この日のためにユリアと俺で特訓してきたんだ。

…この5年間でまさか抜かれそうになるとは思わなかったがな。ほんと、羨ましいぜ。

ただ、これからの事についてはまったく頭を悩ませなくて良いな。

シリイが冒険者になったら直ぐに頭角を表すだろう。そして…お金をざくざくと…

いやあまだまだ長い人生なのに、もう将来が安泰するとはな！はははは！

ユリアも俺と同じなのか、将来に夢を膨らませている最中だぜ。

ま、その前に一端な冒険者にならなくちゃな。シリイ…お前なら出来るぜ。…たぶん。

いつもの服に汚れてもいいブーツを履いて近くの森の中へ。

ちゃんと、二人が付いて行っているのを確認し歩くこと10分。はい到着。

この地域に住んでいてなおかつ冒険者になるやつのは大半はお世話になるこのダンジョン。

村も近いし、道中危険も無い。ダンジョン内もトラップもほとんど無い。敵も初心者向けの

このダンジョン。このダンジョンの奥にある花を採取するまでが冒険者の登竜門だと俺は思っている。

ここから羽ばたく冒険者だって数多い。まさに一番最初に潜るには打ってつけの場所なのだ。

ちらりと横を見ると少し顔を強張らせて…いるのか、まあ少なくとも緊張しているのだろっ、シリイに一声掛けて

緊張を解してやるかと思って一声掛けたら、途端に重厚な魔力がシリイから漏れ出した。

周りの動物たちが一斉に逃げ出す。く！なんつう馬鹿魔力！世界中で5本の指に入るんじゃないのか？

ふっと、圧力が消えた途端に嫌な汗がどつと噴出してくる。…我が娘ながら恐ろしい…

いや、可愛いんだけどね。絶対に訓練以外で戦いたくねえ。俺の勘が叫んでる。殺し合いでは絶対に勝てないと。

案の定。アイスニードルとか言う氷の魔法を発動したが…針じゃな

いな。槍だな。

何か数えるのも馬鹿らしいんだけど。更に加速の魔方陣だと！？おいおいおい！ゴブリン3体なんて無慈悲な連携魔法を！

つつか怖い！何だこれ？こんな魔法教えてたの！？と目線でユリアに訴えかけるが…横に振るだけ。

つまり、一人で生み出した魔法なのか。…もう、モンスターの知識を仕入れるだけで世の中渡っていけるんじゃないのか？

ま、まあ魔法はあれだったが、戦闘については本番では中々体が動かないぞ？

そうアドバースをしようとしたが、全身に馬鹿らしいほど魔力を掛けて疾走。まさに疾風の一言がお似合いで

一瞬のうちに数十メートルの距離を埋めて一瞬で展開した氷の大剣をゴブリンめがけて振り下ろした。

その直後に横に一閃。ずるっという音だけで断末魔をあげる暇さえ与えなく、殲滅。

その後空間を氷付けにしてゴブリンを氷のオブジェにして粉々に…
…確かに最初にいったさ。「攻撃される前に切れ」と。ああ、いったさ。

まさか、こんな形で体现されるとは…後は実践経験だな。既に俺たちより強いんじゃない？ハハハ…

…っかし…家の娘はどのような状況でも可愛いなあ…

side シリイ

ゴブリン殲滅後これまで同様の魔法で殲滅したり、剣で殲滅したり。観察したりして初心者用ダンジョンを踏破した。あまりにもあっけなかったので本当にこれで終わりかよ。と探ってみてもこのダンジョンの最下層で咲く花が一面に咲いているだけ。

もしかして、俺ってやっぱりチート？

いやいや、世の中は広い。まだまだ強くななくちゃ。

「強くならなきゃ…」

両親がその呟きに答えるように

「そ、そうだな！まあまだまださ！はははは…」

「ええ、まだまだ世の中広いわよお！おほほほ…」

「「はあ」「」

何故ため息をついた。我が両親よ。え？次からは一人で行って来いって？マジですか…

2話 初めてのだんじょん（後書き）

もっとチート化したい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6097o/>

ほのぼの異世界生活

2010年10月31日21時03分発行